



みんなの水泳……日々徒然

第32回日本身体障がい者水泳選手権と 第8回ASEAN Para Games見聞録 ～2020東京に向けて…徒然～

はじめに

前回は、2015年8月8日～15日に、トロント(カナダ)で開催された「トロント2015パラパンアメリカン大会」について、見聞きたことや感じたことをお伝えしました。

今回は、2015年11月6日～8日に、仙台で開催された「第32回日本身体障がい者水泳選手権大会」と、11月30日～12月6日に私が参加した「第8回アセアンパラ大会」(シンガポール)について、お伝えします。

IPC公認大会としての日本選手権!

今回で第32回となった「日本身体障がい者水泳選手権大会」ですが、初めてIPC公認大会となりました。

視覚障がいの国際クラス分けも実施され、オーストラリア、韓国、シンガポール、ベトナムからも、数名ずつではありますが選手団を迎えての大会となりました。英語でのアナウンスも行われるなど、いつもと違い「プチ国際大会」という雰囲気でした。(※広くオープンに外国勢のエントリーを受け入れるいわゆる「国際オープン大会」としてではなく、数か国の参加を調整して実施されました)

2020年の東京パラリンピックに向けて、向上させる必要があると感じたことがいくつかありました。

ひとつは、水中スタートする選手のレース前の入水についてです。自分のコースのスタート台の横から入水できる機能のある選手でも、プールサイドまで移動して入水し、レーンロープをくぐりながら、自分のコースに行くことが多い印象を受けました(多くの国際大会でS1、S2以外のクラスでは、ほぼ自分のコースのスタート台の横から入水します。S1、S2でも介助つきではありますが、自分のコースのスタート台の横から入水する選手がいます)。

競技を始めて間もないのであれば理解ができますが、競技者として成熟していくためには「泳ぐこと」だけでなく、こういった部分においてもしっかりとスキルを身につける必要があります。ぜひ、自分のコースのスタート台の横から入水できるように練習して欲しいと思います。

次に、入退水介助についてです。競技会では、基本的に、介助者は入水せずに介助を行うことが求められます。水中での姿勢コントロールスキルを身につける指導が不可欠です。

また、大会会場で貸出用の車いすが足りない場面があったようですが、日本以外の大会に行くと、車いすの貸し出しなどは一切ありません。日本では、切断の選手がプール用の車いすを使うことができますが、海外では見かけることはありません。「いつかは国際大会に」と思うのであれば、こういった部分について

も、慣れていくことが必要となってきます。

視覚障がいの国際クラス分けも実施

今回の日本選手権では、視覚障がいの国際クラス分けが実施され、13名の選手がクラス分けを受けました。限られた国際クラスファイアを有効活用するための共通ルールがあり、日本が費用負担をするにしても、枠のすべてが日本に与えられるわけではありません。1日に実施できる選手枠数のうち6割がホスト国(今回は日本)に配分されます。また、日本人だけが参加する大会で国際クラス分けが実施されることも基本的にはありません。

お国が違えば…いろいろ

今回の日本選手権に参加したオーストラリアチームのタッピングデバイスについて、お話を伺ったところ、長さは3.5mで、この選手の2ストロークに合わせてあるとのこと、ペンキ塗り用のポールを加工して作ったそうです。

日本では、選手の頭部をタッピングして(タッピングバーでたたいて)合図することが多いですが、諸外国では背中や肩周辺をタッピングすることが多いように思います。



日本選手権に参加したオーストラリアチームの長いタッピングバー

ASEAN Para Games…この地域ならではの できごとがいっぱい!

ASEANとは、1967年の「バンコク宣言」によって設立された「東南アジア諸国連合」で、現在は、タイ、インドネシア、シンガポール、フィリピン、マレーシア、ブルネイ、ベトナム、ラオス、ミャンマー、カンボジアの10か国で構成されています。この10か国での総合大会が「ASEAN Para Games」です。2001年から2年おきに開催されているそうです。

まだまだパラ水泳の知識などが乏しい国も多く、Nステイタスでクラス分けを受ける選手の多くは、クラス分け受検後にエントリークラスが変更になりました。「1種目1NPCから3名まで参加できる」という決まりがあり、選手団も運営側も調整に苦労しているようでした。

各泳法や競技規則についても基本的な知識が欠如している印象を受けました。例えば、片下肢にポリオの影響がある選手が、影響のない方の下肢も動



大会会場



競技観戦をするクラスファイアが見ているのはこんな風景です



スタート台ごとにスピーカー付きでした



コロラドタイミングのスターター機器

かさない状態、つまりレグドラッグで平泳ぎを泳ぐなど、「持っている機能を発揮して泳ぐ」という観点がまったく見かけませんでした。平泳ぎのスタート・ターン後のひとかきひとけりも知らない選手がいたり、S11種目でタッパーが片側だけしかいない…しかもレース開始後すぐにいなくなったり(この場合、選手は失格になります)、S11の400m自由形を平泳ぎで泳ぐ選手が複数いたり…等、なかなか他の大会では見られないことがありました。

競技規則やクラス分けなどについて、知識や指導法の普及活動が必要だと強く感じました。

IPC Swimmingの研修もろもろ…

今回の「ASEAN Para Games」には、IPC Swimmingの研修がいくつか併催されました。

クラスファイアを養成する資格であるクラス分けエジュケーター研修(3日間)、クラスファイア養成研修(3日間、資格更新も含む)に加えて、ITO(国際テクニカルオフィシャル)養成研修が、大会での実践を含む形で実施されました。



クラスファイア研修



P1クラスファイアと研修生

私は、エジュケーター研修を受講、その後エジュケーターとして、クラスファイア養成研修と大会のクラス分け・競技会に実践の場として、参加したわけですが、日本とはスタイルの全く異なる研修に大いに刺激を受けました(…と同時に、疲労困憊しました…)。

あらためて、国際場面での発言の仕方や表現力の重要性を感じました。2020年の東京パラリンピックは、日本国内で行われるとはいえ、英語でのコミュニケーション力はあらゆる場面で重要になると思います。みんなで、英語、頑張りましょう!

音楽はいつも、人を笑顔に…

水泳のみならず、大会の各競技の様子はTV放映されており、レースや表彰式は分刻みでコントロールされる状態でした。ともすれば、レースも表彰もない時間が生まれてしまうのですが、そういった時間調整時には、音楽や会場の大型スクリーンを駆使して、DJとアナウンサーが観客を盛り上げていました。音楽も60年代ものから最新ヒット曲まで幅広く選曲されており、大変

楽しい雰囲気、会場は常にノリノリでした。

プール家屋は吹き抜けで……

このプールの壁面は、ブラインドのように半開放タイプになっている珍しいものでした。屋根は吹き抜けで、天井には観客席に向けて大きなファンがついていました。湿度の高いシンガポールですが、ファンが回ると快適に感じました。



プールの壁はこんな感じで、常時開いたままのものでした



プールの屋根はあるけど吹き抜けで…天井には大きなファンも数台ついています

選手村はなんと……!!



大会ののぼりもあちこちに見られました

選手村はなんとあのマリーナベイサンズホテルで、シンガポールの国力を見せつけられたような感じでした。街のいたるところに大会の旗が見られたり、ホテルのルームキーや地下鉄カードも大会仕様になっていたり、国の独立50周年とともに国をあげて取り組んでいるという印象でした。



ホテルのルームキーや地下鉄カードも大会仕様



選手村はなんとあのマリーナベイサンズホテル



街のいたるところに大会のマスコットたちがいました

車いすもクラッチも装具もなく…

このASEAN地域の特性なのでしょう、これまでの他のどの大会でも見たことがないくらい、ポリオの選手が多い印象でした。水泳は、水の中では身体ひとつで競技するわけですが、20代の若い両下肢ポリオの選手が、車いすもクラッチも装具もなく、地面を這うようにして移動しているのを目の当たりにして、言ひようのない気持ちになりました。そんな状況でも、泳ぐこと、チームメイトの応援、他国選手との交流に一生懸命な選手が多く、「若者が若者らしい眼をしている」のが非常に印象的でした。